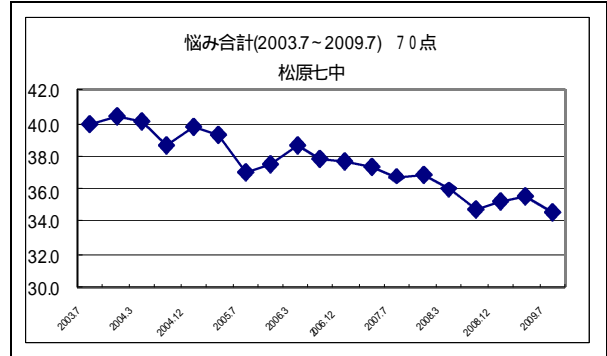
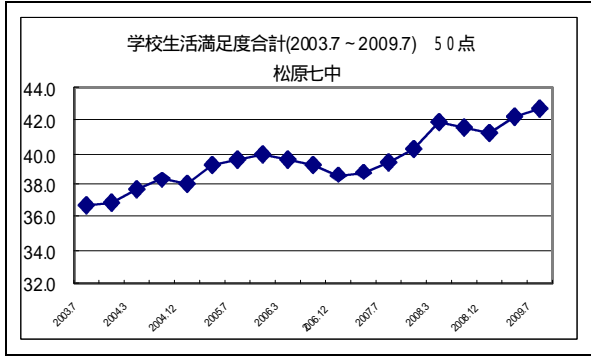


ガイダンスカリキュラム(授業型の生徒指導)の授業と工夫

- 模擬授業で体験する「育てる生徒指導・教育相談」の最前線 -

大阪府松原市立松原第七中学校
 深美 隆司
 曾和 幸子

1. 子どもの実態

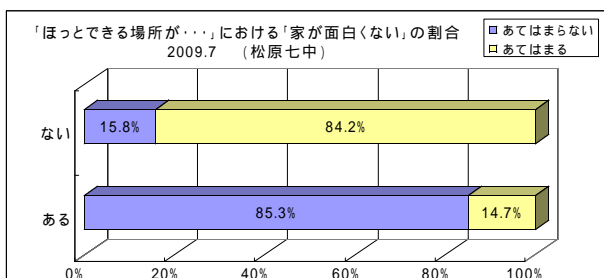
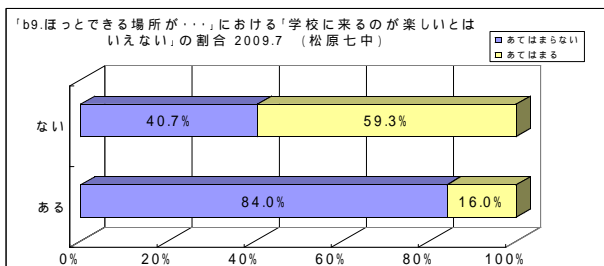
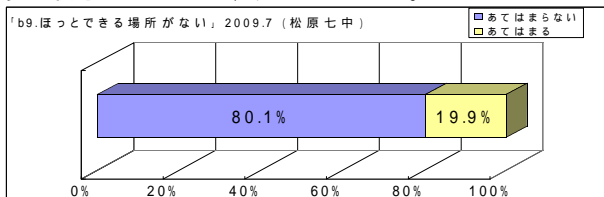


松原第七中学校では、2003年度から文科省の研究開発学校の指定を受けて、「いじめ・不登校の未然防止、不登校生等の学校復帰」をめざして取り組んできた。更に、2007年度からは、校区として恵我幼稚園、恵我小学校、恵我南小学校の3校1園で、文科省の研究開発学校の指定を受け、地域ぐるみでの人間関係づくりに取り組んでいる。松原七中では、今年で7年目となるが、2003年度から各学期末に実施している学校生活調査(a学校生活満足度、b悩み、cストレス反応、dストレス対処、eストレスサー、f自己肯定感)をもとに効果測定を行っている。効果測定の目的は、主に

- 子どもの実態を知り、実態にあわせた人間関係学科の内容を実施する
- 人間関係学科の効果を数値で検証する
- アンケート結果を共有し、いち早く子どもの変化に対応し、適切な支援を行う

という3点があげられる。上のグラフは、この7年間のa学校生活満足度とb悩みの数値の推移である。10数年前の荒れていた状態から、地域とのつながりや総合的な学習の構築、そして人間関係学科の取組等の積み上げを通じて、子どもたちの学校生活への満足度は上昇してきた。それに応じて、子どもたちの悩みが減少してきたことがわかる。学校の様子も、今では、子どもたちは落ち着いた環境の中で学校生活を送ることのできる学校へと変わってきた。

しかし、そんな中でも、「ほっとできる場所がない」子どもたちは、まだまだ存在し、そんな子どもたちがどのような状態であるかを、見ていきたい。



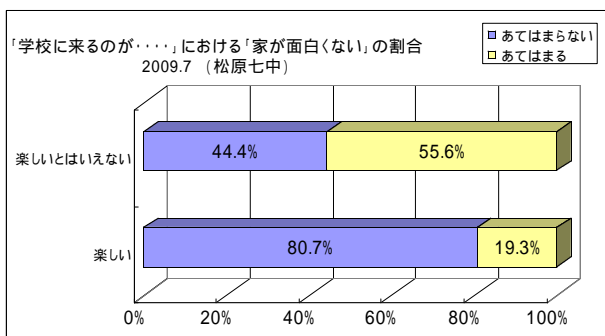
(中学校では)

中学校における学校生活調査は主に5件法で調査をしているが、5件法のうちの、「3.どちらともいえない」に関しては「ほっとできる場所がない」に含み、算出をした。すると、全体の19.9%が「ほっとできる場所がない」と答えた。「a1.学校に来るのが楽しい」を逆転して解釈して「3.どちらともいえない」を「学校に来るのが楽しいとはいえない」グループに含んで見た。

「ほっとできる場所がない」と「ある」子のグループを分けて見ると、「ほっとできる場所がある」と答えた子のうちの16.0%が「学校に来るのが楽しいとはいえない」となったのに対し、「ほっとできる場所がない」子どものグループの59.3%もの子が「学校に来るのが楽しいとはいえない」と答えていた。実に4倍弱である。次に、「ほっとできる場所がない」子のうちの、「b8.家が面白くない」子の割合を同じように調べると、左グラフのようになった。

「ほっとできる場所がない」と答えた子は、「ある」と答えた子のおよそ5.5倍にあたる84.2%の子が「家が面白くない」と答えている。「ほっとできる場所がない」と答えた子のうちのほとんどが「家が面白くない」と答えていることがわかる。

中学生という思春期のまっただ中にいる子どもたちが、最近特に厳しくなっている「生活苦」の問題や、「子どもを受け容れることができない保護者の急増」という問題などがあ



中学校の尺度	楽しくない 面白くない	左記 以外
a.学校生活満足度	33.8	44.0
b.悩み合計	47.3	32.5
c.ストレス反応合計	35.1	27.4
d.積極的 コーピング合計	2.18	2.79
d.攻撃的 コーピング合計	2.15	2.05
e.ストレスナー合計	74.9	58.0
f.自己肯定感合計	10.3	14.5
被侵害得点	11.0	6.7
侵害得点	3.7	3.5

尺度の解説

a.学校生活満足度	5件法 × 10問	50点
b.悩み合計	5件法 × 16問	80点
c.ストレス反応合計	5件法 × 15問	75点
d.コーピング平均	5件法	5点
e.ストレスナー合計	6件法 × 24問	144点
f.自己肯定感合計	2件法 × 25問 (逆転項目 17問)	25点
被侵害得点		
b4.無視される		
b5.いやなことを言われる(される)		
b6.仲間はずれにされる		
e17.人から陰口を言われたり、うわさ話をされること	5件法 × 3問 + 6件法 × 1問	21点
侵害得点		
d6.人が嫌がることを言う		
d7.人をたたく	5件法 × 2問	10点

(小学校では)

恵我小学校・恵我南小学校では、2007年度から学校生活調査を各学期末に実施している。小学校においては、なかなか、教員が表計算ソフトになじめない部分があった。しかし、小学校独自の研修や効果測定にむけた体制づくりの中で、子どもたちの変容をアンケートの集約を通じて把握するというスタイルが定着してきた。子ども個別の支援においても、子どもの成長を効果測定による結果で裏づけし、支援の成果として認知できるケースが多数出てきている。それと、何よりの成果は、校区として、小学校と中学校が共通した尺度をもち、共通した言語で子どもの変容を確認できる手段として学校生活調査などのアンケート調査が位置づいたことである。校区としての成果ではないだろうか。ここに至るまでは、一つひとつのアンケート項目の問い方や、尺度自体をどう小学校の子どもたちの実態に合わせていくのかという事などの論議やアンケート内容の変更を繰り返しながら、現在の状態に落ち着いてきた。小学校と中学校の学校生活調査は、そういう意味では、全く同じものではないが、基本的なスタイルは一貫したものであると言える。現在、小学校においては、低学年からアンケート調査を行っているが、本研究紀要における校区の分析においては、小学校のデータは中学年・高学年、つまり3年生から6年生のものを使用している。恵我小、恵我南小として学校の数値としてあらわしているものは、3年生・6年生のものであることを、まず、確認しておきたい。それと、f.自己肯定感の調査に関しては、発達段階を考慮して高学年(5年生・6年生)のみ実施していることをご理解いただきたい。

そこで、松原七中と同じ観点で、もっとできる場所がない子どもたちの実態を見ていくことにする。

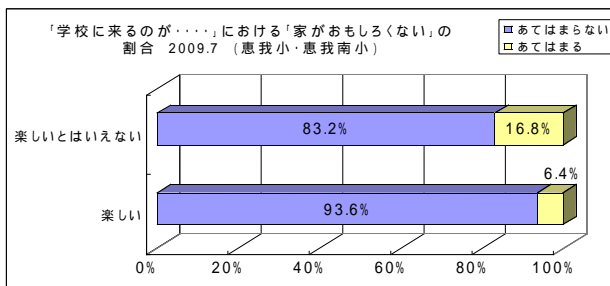
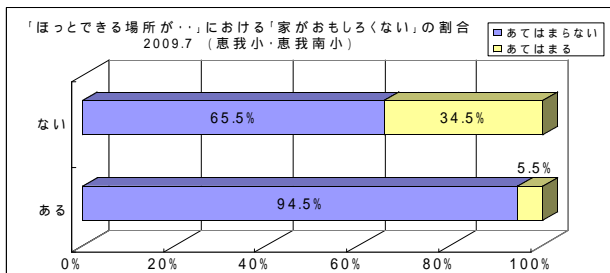
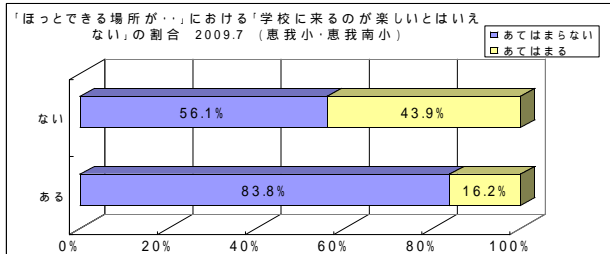
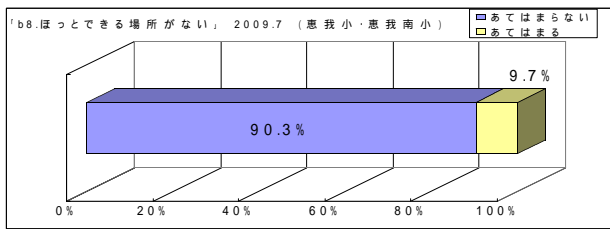
るにせよ、家にいる人たちとの好ましいコミュニケーションが成立していないということがあらわれていると言える。

ここで、非常に気になってくるのが、「学校に来るのが楽しいとはいえない」くて、なおかつ「家が面白くない」と感じている子どもたちのことである。その子どもたちの割合を調べてみると、下表のようになった。

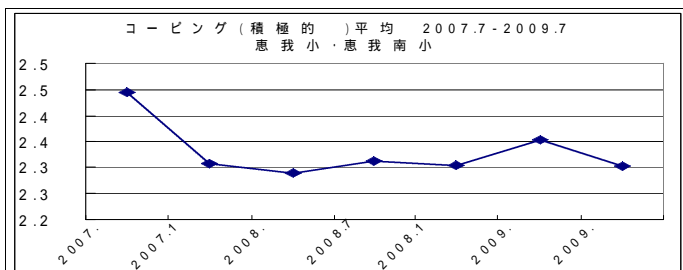
「学校に来るのが楽しいとはいえない」子のうちの55.6%の子が「家が面白くない」と答えている。松原七中の中では、人数にして40名(有効回答を得た子)である。学校生活調査の活かし方は、大きく分けて2つある。一つは、数値の推移を測定して効果を検証したり、様々な尺度とのクロス分析や、相関を調べたりすることで、子どもの実態を立体的に把握したり、効果を実証したりすることである。さらに二つ目は、それぞれの尺度により、子どもの変化をいち早く察知し、教員の中で情報を共有化していくことで、子どもたちへの支援を迅速に行っていくということである。子どもは、家と学校で生活のほとんどを過ごす。その両方に対して負の感じ方を迫られている子は、どのような状態なのであろうか。教員の支援をこの子たちへ行きわたらす意味でも、学校生活調査の中の尺度で、この40名の状態を調べた。

「学校が楽しいといえなく」て「家が面白くない」と感じている子の平均は、「そうでない」という子の平均と比べて、a.学校生活満足度が約10ポイント低く、b.悩みが約15ポイント高い。そして、その差からあらわれる、身体や心や行動にあらわれるc.ストレス反応は約8ポイント高くなっている。しかも、ストレスを軽減するためのd.積極的コーピング(スポーツをする、人に相談する)においては、平均値(5件法)で0.5ポイントも低くなっている。高いストレス値を軽減することなく、それが更なるストレスナー合計の約17ポイントの差となってあらわれ悪循環に陥っていることがわかる。その結果、個としての自立をあらわすf.自己肯定感の数値に4ポイントとしての差となり、まわりとの関わりがより依存的な状態になっていると言える。「いじめ未然防止」の観点においても、被侵害得点の差が約6ポイントあり、まわりから侵害されている度合いが高いという実態が浮き彫りになってくる。

松原七中は、この7年間の取組を通じて、かつての「荒れた」「厳しい状態」から、落ち着いた学校へと変容を遂げてきた。しかし、まだまだ、教員の支援を必要とする子どもの心の叫び声が聴こえてくる実態があることが、学校生活調査の数値から読み取ることができる。



小学校のアンケートは4件法中心であり、質問数も異なるので、単純比較はできないのであるが、基本的には中学校と同じ構図であることがわかる。しかし、ストレス反応の差を見ると、その差の大きさに気づく。そして、それがあらわれる攻撃的コーピング（b5.人をたたく、b6.人がいやがることを言う、b7.人をたたく）の平均が、中学校に比べて大きな差となっていることがわかる。小学校のアンケート結果を経年で見ると、積極的コーピングの平均値がなかなか上昇していないところに、小学生がもつ特徴があるのかもしれない。



(登校回避感情をもつ子どもたち)

学校生活調査のd.コーピング(ストレス対処)の質問項目の中に「d10.学校を休む」というものがある。この項目に「あてはまる・どちらともいえない」と答えた子を登校回避感情をもつ子という規定を行い、中学校の学校生活調査をもとに、見ていきたい。登校回避感情をもつ子どもたちは、いったいどのような感じ方を持ち、どのような行動をとるのであろうか。普段、子どもと接していると、おおまかには感じることはできるが、2009年7月の学校生活調査による子どもたちの回答をもとに、その実態をあらわしていきたい。相関を調べていくと、45の領域と質問に相関があると出た。総じて、登校回避感情が高いと、ストレス関連の好ましくない部分も高くなり、攻撃的なコーピングも高くなる。しかし、その中でも積極的コーピングや「d4.先生に相談する」などに相関があらわれている事に注目できる。

まず、小学校においては、この調査を4件法で行っているので、中学校のように「3.どちらともいえない」グループは存在していない。「b8.ほっとできる場所がない」という質問に「あてはまる」と答えた子は、9.7%と、中学校の約半分であることがわかるが、その中で「学校に来るのが楽しいとはいえない」子どもたちは、43.9%と中学校との差は10ポイントないことがわかる。「b7.家がおもしろくない」という質問に「あてはまる」と答えた子は34.5%と、中学校に比べると50%低い。小学校の時点では、子どもたちは中学校に比べるとまだまだ、居場所がある感が持続されていることがわかる。しかし、このギャップをどう捉えるかということは、単に、中学生の思春期ということだけでは済まされない大きさなのではないだろうか。

「学校に来るのが楽しいとはいえない」「家がおもしろくない」子どもたちは小学校では16.8%、人数にして19名(有効回答を得た子)である。中学生に比べて依存度が高い小学生においてこの人数が、多いのか少ないのかは更に検証が必要である。

小学校の尺度	楽しくない 面白くない	そうでない
a.学校生活満足度	26.8	33.4
b.悩み合計	29.5	19.0
c.ストレス反応合計	35.6	20.8
d.積極的 コーピング平均	1.71	2.32
d.攻撃的 コーピング平均	2.00	1.60
e.ストレッサー合計	38.0	25.5
f.自己肯定感合計	10.3	14.5
被侵害得点	9.9	6.6
侵害得点	3.8	3.0

尺度の解説

a.学校生活満足度	4件法×10問	40点
b.悩み合計	4件法×12問	48点
c.ストレス反応合計	5件法×12問	60点
d.コーピング平均	4件法	4点
e.ストレッサー合計	4件法×15問	60点
f.自己肯定感合計	2件法×15問 (逆転項目9問)	15点

被侵害得点

b4.無視される		
b5.いやなことを言われる(される)		
b6.仲間はずれにされる		
e12.こそこそ話をされること	4件法×4問	16点

侵害得点

d6.人がいやがることを言う		
d7.人をたたく	4件法×2問	8点

登校回避感情と全領域との相関

コーピング（攻撃的）平均	0.336 **
ストレス反応合計	0.285 **
悩み合計	0.272 **
被侵害得点	0.224 **
ストレッサー合計	0.211 **
コーピング（積極的）平均	0.158 **
2009年欠席数	0.117 *

登校回避感情と学校生活満足度との相関

a_2 楽しいな授業がある	-0.131 *
---------------	----------

登校回避感情と悩みとの相関

b_15 顔やスタイルなどの外見のことで悩んでいる	0.262 **
b_6 仲間はずれにされる	0.262 **
b_7 先生との関係が良くない	0.251 **
b_1 勉強が分からない	0.219 **
b_11 自分は周りの人に理解されていない	0.209 **
b_10 異性のことで悩んでいる	0.192 **
b_5 嫌なことを言われる（される）	0.188 **
b_8 家が面白くない	0.186 **
b_9 ほっとできる場所がない	0.175 **
b_3 友達とトラブルがある（多い）	0.161 **
b_12 人と比べて、自分はダメなところが多いと思う	0.158 **
b_4 無視される	0.151 **
b_14 自由な時間がない（少ない）	0.118 *
b_13 運動が苦手な悩んでいる	0.115 *

登校回避感情とストレス反応との相関

c_5 胸が痛む	0.338 **
c_2 頭痛がする	0.261 **
c_3 首筋や肩がこる	0.255 **
c_11 家に帰っても、ゆううつ	0.233 **
c_6 物事に集中できない	0.208 **
c_9 胃腸の具合が悪い	0.194 **
c_4 体が緊張している	0.194 **
c_1 とても疲れている	0.183 **
c_13 イライラする	0.183 **
c_7 眠れない	0.175 **
c_10 食べ過ぎる	0.174 **
c_8 気分が悪い	0.165 **

登校回避感情とコーピングとの相関

d_6 人が嫌がることを言う	0.357 **
d_7 人を叩く	0.337 **
d_14 泣く	0.314 **
d_4 先生に相談する	0.247 **
d_13 食べる	0.225 **
d_9 一人でじっくり考える	0.215 **
d_5 モノにあたる	0.174 **
d_12 寝る	0.166 **
d_3 家族に相談する	0.147 *

登校回避感情と自己肯定感との相関

f_10 私はすぐ人のいいなりになります	0.143 *
f_1 私は今の自分とはちがう人になりたいと思います	0.130 *

Pearson の相関係数で

* 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です

** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です

（被侵害度の高い子どもたち）

松原七中校区では、学校生活調査にある 4 つの質問〔b4.無視される b5.いやなことを言われる（される） b6.仲間はずれにされる e17.人から陰口を言われたり、うわさ話をされること〕を合計（21点）して被侵害得点として位置づけ、子どもたちがまわりから言語的、身体的なピア・プレッシャーを受けていると感じているかを調べてきた。そもそも、この 4 つの項目どうしの相関は極めて高い。

	b_4	b_5	b_6	e_17
b_4	1	-	-	-
b_5	0.529 **	1	-	-
b_6	0.782 **	0.547 **	1	-
e_17	0.393 **	0.566 **	0.385 **	1

Pearson の相関係数で

* 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です

** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です

ひとことと言うなら、被侵害得点の高い子は、ストレス関係の数値が高く、満足度や肯定感が低いということになる。（悩み合計には b4b5b6 が含まれているため当然相関は高くなる）満足度のすべての項目に負の相関があり、悩みの項目の大半、ストレス反応の全項目に相関が見られた。さらに、コーピングとの関連では、侵害得点に位置づけている「d6.人が嫌がることを言う、d7.人をたたく」の 2 項目と高い相関が出ている。自己肯定感の項目を参考にすれば、依存的（受け身的）であり、なおかつ攻撃的である子どもの姿が浮き上がってくる。依存的（受け身的）な行動と攻撃的な行動とは表裏一体であることがわかる。

被侵害度と全領域との相関

悩み合計	0.736 **
ストレッサー合計	0.655 **
ストレス反応合計	0.475 **
自己肯定感合計	-0.471 **
学校生活満足度合計	-0.434 **
コーピング（攻撃的）平均	0.284 **

被侵害度と学校生活満足度との相関

a_10 休み時間は友達と楽しく過ごしている	-0.426 **
a_6 困ったとき助けてくれる仲間がいる	-0.396 **
a_1 学校に来るのが楽しい	-0.353 **
a_5 悩みを相談できる友達がいる	-0.349 **
a_7 楽しい雰囲気のクラスだ	-0.326 **
a_4 楽しく話せる友達がいる	-0.319 **
a_9 悩みを聞いてくれる先生がいる	-0.276 **
a_2 楽しいな授業がある	-0.248 **
a_8 楽しくておもしろい先生がいる	-0.214 **
a_3 よく分かる授業がある	-0.168 **

被侵害度と悩みとの相関

b_3 友達とトラブルがある(多い)	0.554 **
b_11 自分は周りの人に理解されていない	0.543 **
b_7 先生との関係が良くない	0.476 **
b_9 ほっとできる場所がない	0.443 **
b_12 人と比べて自分はダメなところが多いと思う	0.428 **
b_14 自由な時間がない(少ない)	0.399 **
b_15 顔やスタイルなどの外見のことで悩んでいる	0.398 **
b_8 家が面白くない	0.393 **
b_10 異性のことで悩んでいる	0.392 **
b_13 運動が苦手で悩んでいる	0.372 **
b_16 お金のことで悩んでいる	0.310 **
b_1 勉強が分からない	0.249 **
b_2 がんばっても成績があがらない	0.215 **

被侵害度とストレス反応との相関

c_8 気分が悪い	0.505 **
c_11 家に帰っても、ゆううつ	0.431 **
c_6 物事に集中できない	0.360 **
c_2 頭痛がする	0.347 **
c_5 胸が痛む	0.342 **
c_1 とても疲れている	0.310 **
c_3 首筋や肩がこる	0.310 **
c_12 怒りっぽくなる	0.308 **
c_15 キレた	0.307 **
c_13 イライラする	0.299 **
c_9 胃腸の具合が悪い	0.251 **
c_7 眠れない	0.245 **
c_4 体が緊張している	0.239 **
c_14 小さな音にもびっくりする	0.225 **
c_10 食べ過ぎる	0.222 **

Pearson の相関係数で

* 相関係数は 5 % 水準で有意 (両側) です

** 相関係数は 1 % 水準で有意 (両側) です

(自己効力感の高い子どもたち)

松原七中での 2003 年度 - 2005 年度までの研究開発では、子どもの自己肯定感と社会的有用感を育てることが、不登校の未然防止にむけた課題であることが確認され、取組が進められてきた。私たちはその成果を受け、子どもたちが、まわりの人たちとのつながりをつくり、社会とのつながり (ソーシャルボンド) を築くためのプロセスを追求してきた。松原七中校区における自己肯定感の位置づけは、「個としての自立」である。「自己を受け容れ、自己の判断と行動を自己の意志で行うことができる」ものを自己肯定感と呼んでいる。そういう意味では、一般的に言われている「自尊心」というアサーティブな有り様を含んだ定義づけとは若干異なってくるかもしれない。自己肯定感からソーシャルボンドを基盤にした自己の存在と行動に対する社会からの好ましいフィードバックへの認知にあたる社会的有用感へつないていくにはどうすればいいか。それは、学校や学級、あるいは、子どもを取り巻く人間関係の中で、子どもたちがまわりから認められ、自らの課題と所属集団への課題に取り組み、やりきったという成就感を、どのように育てていくのかということが課題になってくる。教育相談用に校区で実施している「ほっとアンケート」では、「学級や学年や学校の活動に貢献している」などの 10 項目を自己効力感をはかる尺度として用いている。その自己効力感と学校生活調査の領域と全質問との相関を見た。総体的に、登校回避感情・被侵害得点とは逆の相関になっていることがよくわかる。自己効力感が高いということは、学校生活に満足し、ストレスに対する積極的なコーピングを自然と行っている子どもの姿を思い浮かべることができる。その中でも、注目したいことは、b. 悩みの項目の中にある「b4. 無視される」である。無視することは、ゼロストロークと呼ばれている。ストロークとは、人への働きかけ (言語的・非言語的) をあらわすのであるが、概してプラスのストローク、マイナスのストロークに分けられる。プラスのストロークを教育相談やワークショップなどで意識的に使えばフィードバックというものになる。マイナスのストロークは攻撃的なストロークと言いかえることができるが、ゼロストロークはその中でも、最も攻撃性の高いものであると言われている。子どもたちが、まわりからのマイナスのストロークを行為別に分類すると、「無視」というものを最もきついものとして位置づけるケースは多い。その「無視される」と自己効力感が b. 悩みの項目の中で、最も高い相関係数が出てくること自体、自己効力感と「いじめ」とが対極に存在するということがよくわかる。

被侵害度とコーピングとの相関

d_6 人が嫌がることを言う	0.325 **
d_9 一人でじっと考える	0.272 **
d_7 人を叩く	0.244 **
d_8 がまんする	0.241 **
d_10 学校を休む	0.224 **
d_1 スポーツで発散する	-0.210 **
d_14 泣く	0.169 **
d_5 モノにあたる	0.156 **
d_11 遊ぶ	-0.147 *
d_2 友達に相談する	-0.119 *

被侵害度とコーピングとの相関

f_17 私は学校でどうしていか分からなくなることがよくあります	0.401 **
f_21 他の人に比べて私はあまり人に好かれていません	0.344 **
f_12 時々自分がいやになることがあります	0.311 **
f_23 私はしばしば学校でやる気をなくしてしまいます	0.297 **
f_10 私はすぐ人のいいなりになります	0.295 **
f_1 私は今の自分とはちがう人になりたいと思います	0.294 **
f_3 もしできるなら、自分自身について変えたいところがたくさんある	0.267 **
f_15 私は自分自身をあまり信用していません	0.259 **
f_13 いろいろな事がらがごちゃごちゃになって私の生活を複雑にします	0.248 **
f_20 私の親は私のことを分かってくれています	-0.242 **
f_25 私はたよりがいのない人間です	0.234 **
f_22 私はふだん親が私にたくさんのことを要求しすぎるよう感じます	0.220 **
f_9 私の親はふだん私の気持ちを考えて分かってくれます	-0.214 **
f_16 私は家を出たいと思うことがたびたびあります	0.211 **
f_7 何か新しいことになれるのに、私は長い時間がかかります	0.190 **
f_11 私の親は私にたいへん期待しすぎます	0.156 **
f_4 私は、あまり悩まずに、決心することができます	-0.158 **
f_18 他の人と比べて私はあまり顔だちがよくありません	0.154 **
f_24 私はふつうのごとくよくよと悩みません	-0.137 *
f_5 私はつきあってみると、おもしろい人間です	-0.129 *

自己効力感と全領域との相関

学校生活満足度合計	0.574 **
悩み合計	-0.386 **
自己肯定感	0.331 **
被侵害得点	-0.326 **
コーピング（積極的）平均	0.304 **
ストレス反応合計	-0.251 **
ストレッサー合計	-0.175 **

自己効力感と学校生活満足度との相関

a_1 学校に来るのが楽しい	0.455 **
a_3 よく分かる授業がある	0.451 **
a_9 悩みを聞いてくれる先生がいる	0.446 **
a_2 楽しい授業がある	0.420 **
a_5 悩みを相談できる友達がいる	0.399 **
a_10 休み時間は友達と楽しく過ごしている	0.372 **
a_4 楽しく話せる友達がいる	0.364 **
a_6 困ったとき助けてくれる仲間がいる	0.363 **
a_8 楽しくておもしろい先生がいる	0.340 **
a_7 楽しい雰囲気のクラスだ	0.282 **

自己効力感と悩みとの相関

b_4 無視される	-0.340 **
b_3 友達とトラブルがある（多い）	-0.338 **
b_6 仲間はずれにされる	-0.329 **
b_12 人と比べて自分はダメなところが多いと思う	-0.323 **
b_7 先生との関係が良くない	-0.276 **
b_11 自分は周りの人に理解されていない	-0.272 **
b_13 運動が苦手で悩んでいる	-0.272 **
b_5 嫌なことを言われる（される）	-0.260 **
b_2 がんばっても成績があがらない	-0.243 **
b_9 ほっとできる場所がない	-0.205 **
b_1 勉強が分からない	-0.202 **
b_14 自由な時間がない（少ない）	-0.185 **
b_15 顔やスタイルなどの外見のことで悩んでいる	-0.167 **
b_16 お金のことで悩んでいる	-0.164 **
b_8 家が面白くない	-0.153 **
b_10 異性のことで悩んでいる	-0.122 **

自己効力感とストレス反応との相関

c_6 物事に集中できない	-0.299 **
c_7 眠れない	-0.245 **
c_2 頭痛がする	-0.232 **
c_1 とても疲れている	-0.223 **
c_13 イライラする	-0.203 **
c_8 気分が悪い	-0.198 **
c_12 怒りっぽくなる	-0.182 **
c_10 食べ過ぎる	-0.130 *
c_4 体が緊張している	-0.121 *

自己効力感とコーピングとの相関

d_1 スポーツで発散する	0.324 **
d_2 友達に相談する	0.213 **
d_11 遊ぶ	0.166 **
d_3 家族に相談する	0.158 **
d_4 先生に相談する	0.148 *

効力感と自己肯定感との相関

f_25 私はたよりがいのない人間です	-0.307 **
f_15 私は自分自身をあまり信用していません	-0.292 **
f_23 私はしばしば学校でやる気をなくしてしまいます	-0.271 **
f_21 他の人に比べて私はあまり人に好かれていません	-0.253 **
f_5 私はつきあってみるとおもしろい人間です	0.225 **
f_3 もしできるなら自分自身について変えたいことがたくさんある	-0.194 **
f_18 他の人と比べて私はあまり顔だちがよくありません	-0.193 **
f_17 私は学校でどうしていか分からなくなることがよくあります	-0.181 **
f_7 何か新しいことになれるのに私は長い時間がかかります	-0.172 **
f_16 私は家を出たいと思うことがたびたびあります	-0.168 **
f_13 いろいろな事がらがごちゃごちゃになって私の生活を複雑にします	-0.154 **
f_2 私はクラスの前ではたいへん話しくいいます	-0.147 *
f_12 時々自分がいやになることがあります	-0.142 *
f_8 私は同じ年ごろの人たちに人気があります	0.140 *
f_14 私より年下の人たちは私の言うことをよく聞きます	0.140 *
f_1 私は今の自分とはちがう人になりたいと思います	-0.140 *
f_4 私はあまり悩まずに決心することができます	0.128 *
f_6 私は家ですぐ腹を立てます	-0.115 *

Pearson の相関係数で

* 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です

** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です

2. 人間関係学科や不登校生等への支援の取組などによる効果

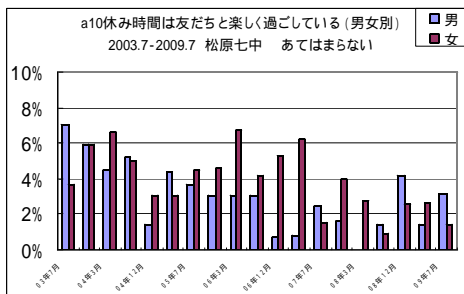
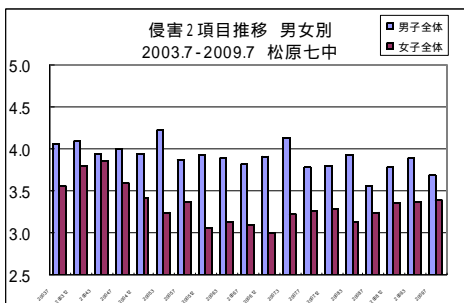
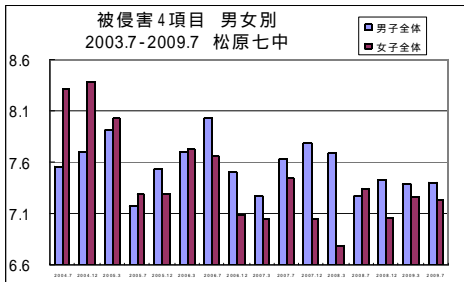
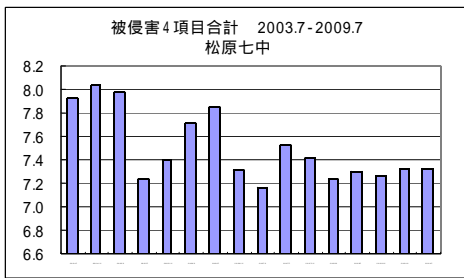
（いじめに関わる項目より）

2003年度から2008年度まで、2006年度の若干の落ち込みはあったものの、学校生活満足度合計（合計50点）は年々増え続け、調査開始から本年3月までの間、およそ7ポイント以上の上昇を見せている。本年7月調査がこれまでの最高値となっており、上昇傾向にあると言える。

その上昇理由の原因は、いくつか考えられる。中でも、「まわりからの行為」ということでピア・プレッシャーの観点から考えていくと学校生活調査の中の、

b4 無視される b5 いやなことを言われる（される） b6 仲間はずれにされる
e17 人からの陰口、うわさ話をされること

という4つの項目を拾い出した。合計点（合計21点）を被侵害得点として、2003年度からの経緯を見ると、本年度まで徐々に減少していることがわかった。生徒指導部会や学年会議の中での事例検討を通じて、近年では、子どもたちの中で突発的・単発的な事例は発生しているが、継続的・深刻的な事例には至らずにすんでいる。学校生活



調査やふりかえりシートなどのアンケートにより、子どもの変化をいち早くキャッチし、それを教員間の共通認識にまで高め、いじめをする側・される側の双方に、複数の支援を様々な角度から迅速に行ってきた。その結果が、現在の松原七中の現状をつくり出していると言える。また、いじめに関わらず、子どもたちのトラブルや悩みに常にアンテナを張り、必要に応じて適切な支援を供給し、子どもたちとの相談活動を展開している。それに加え、それぞれのアンケート調査によって、子どもたちと教職員とがつながり、様々な問題の抑止力となっているとも言える。そんな人間関係学科を真ん中に据えた学校づくりの成果として、これら4項目における変化があるのではないだろうか。

これを男女別のデータに分けてみると、男子の変化の割合に対して女子の変化の割合が大きいことに気づく。女子の数値は2006年度まで減り続け、一時は男子に比べてかなり低い時期もあったが、直近2回の調査においては、ほぼ同じ得点にまで落ち着いてきた。この女子の変化の割合が大きいことについては、特に女子の小グループ化という特徴に対して、自己開示を中心とした人間関係学科の成果であると言える。

さらに、「侵害する」という観点で推移を調べていくと、学校生活調査のストレス対処の項目の中にある

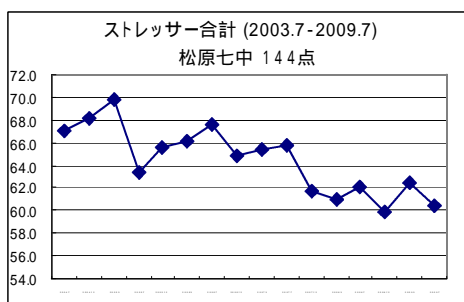
d6 人が嫌がることを言う d7 人をたたく

という項目を合計(合計10点)して、侵害得点と位置づけてみた。するとこれも、女子の変化の割合に対する男子の変化の割合の低さに気づく。「d6 人が嫌がることを言う」「d7 人をたたく」という行為は、「関係性の行為」である。これらの行為は、試し行為などとしても望ましい表現を取ることができない中に根強く存在しているのかもしれない。

そこで、子どもたちの関係性の積極面を見れるかもしれないということで、「a10 休み時間は友だちと楽しく過ごしている」の項目を調べてみた。その中の「あてはまらない」の回答を見ると、男子においては順調に減少し、2008年度3月調査では0%という驚くべき数値が出ている。遊びや会話を通じた良好な関係性の構築に、いじめに対する有効性を見いだすことができるのかもしれない。一方女子における課題は、女子が作りがちな閉鎖的な小グループに対してどれだけ風穴を開け、風通しのよい集団にしていくか、ということがあげられる。松原七中の人間関係学科の主要なターゲットスキルは「自己信頼」「共感性」「コミュニケーション力」「対人関係」である。年度や学期の節々には、「わたしのじゃがいも」「さいころトーク」「コロコロトーク」「ルーレットトーク」「すごろくトーク」などの自己開示のプログラム

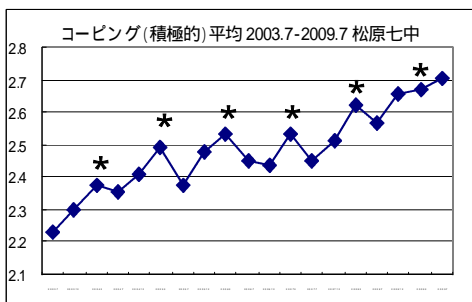
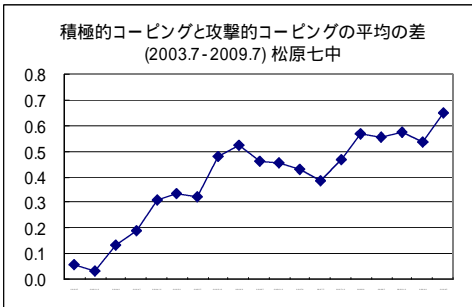
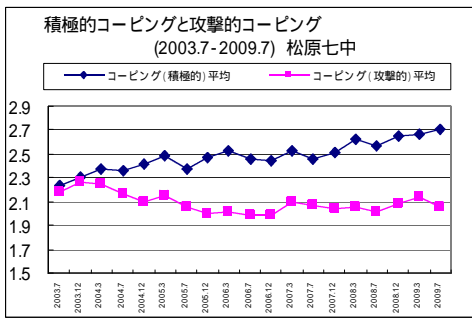
を実施している。その積み重ねが女子の小グループ集団どうしに風穴を開けているのであろう。いじめの未然防止に関わる有効なスキルは、自己認識を広げ共感性を高めることであると言われている。いじめ問題の解決にあたって常に課題となることが「人の気持ちがかかる」ということである。共感性〔=人の気持ちを想像できる(WHOライフスキルの解説より)〕をさらに育てていくことが、いじめ未然防止の鍵になるのであろう。

(ストレス反応とコーピング)



このグラフは、学校生活調査のeの項目であるストレスの原因となるストレスを測定(24項目合計144点)したものである。(質問: 悩んだりイライラしたことがこの一ヶ月間にあったかどうか答えて下さい。例「e1 自分や家族の将来のこと」) 学校楽しさ度が増してくると、ストレスの原因となるストレスが減少してくることは容易に理解できる。そして、その最大値から最小値までの差はおよそ10ポイントとなっている。ストレスそのものが減少しているのであるから、そこから派生する子どもたちの攻撃的なストレス対処が減少していくことも当然のことである。人間関係学科等の成果により、子どもどうし、あるいは子どもと教員の関係性が深まり、相談活動が活発化してくる。学校

生活調査の中では、このコーピングを「積極的」「攻撃的」「抱え込み」「本能的」の4つの観点で調査をしているが、ここでは「積極的」「攻撃的」の2点に絞って見てみる。項目数が異なるため平均値を算出してグラフに表してみた。(最低値1点、最大値5点)



積極的コーピング
d1 スポーツで発散する d2 友だちに相談する d3 家族に相談する
d4 先生に相談する
攻撃的コーピング
d5 モノにあたる d6 人が嫌がることを言う d7 人をたたく

積極的コーピングと攻撃的コーピングの差 (= 積極的 - 攻撃的) としての推移を表したものが左のグラフである。ほぼ差のない状態からのスタートであったが、現在では、ほぼ 0.6 ポイントの差となっていることがわかる。5 件法 (1 点 ~ 5 点という 4 ポイントの中での変化) での測定であるので、この差は大きいと言える。この差を広げていくことが、いじめ・不登校の未然防止につながっていくことは間違いがない。

さらに、興味深いグラフが積極的コーピング平均の変化をあらわしたグラフに * をつけたグラフである。

年度ごとに注意して見ていくと、* 印をつけた時点まで上昇し、* の次の時点で下降し、また同じパターンで上昇している。そして、* 印はすべて 3 月調査であるという事実がある。学校生活調査は年 3 回、各学期末に実施をしている。実施月は 7 月・12 月・3 月である。新学年になると 7 月から 3 月まで上昇し、次の新しい学年になった 7 月で下降する。つまり、卒業した 3 年生の代わりに 1 年生が入ってくる、あるいはクラス替えがあり新しいクラスになると数値が下がるということである。子ども・教員ともども、スキルアップを重ねている状況が、階段状に上昇しているグラフから読み取ることができる。年度毎に上昇しているのは、子どものスキルアップであり、階段状に上昇しているのは教員のスキルアップや校区連携の成果であろう。クラスや学年の子ども集団をベースにして、一年間の人間関係学科等での学びの成果としてあらわれていることを如実に表している。

更に、一番直近の 2009 年 7 月調査の数値に注目していただきたい。これまでの変化であれば、2009 年 3 月調査 (* 印) からは下がるの

であるが、今回、上昇している。松原七中の 7 年間に渡る効果測定において、初めてのことである。いくつかの要因が考えられるが、松原七中における教員の子どもとの相談活動が充実してきた結果であると言える。

（「学校を休む」子と教員の相談活動）

登校回避感情のところでも触れたように、2009 年 7 月調査の中で登校回避感情という位置づけで「d10 学校を休む」という項目と全ての領域、質問との相関を調べた。統計ソフトの計算結果に * がついた項目を見ていると、「d4 先生に相談する」という項目に * * がついているのを発見した。少々、驚きと感動を覚えながら「そうか、登校回避感情をもつ子は、先生に相談するの？」と。でもこれは研究開発の成果かも知れないと直感して、2003 年 7 月からの相関を全て調べてみた。それが、右の表である。参考までに、この質問に対して、「3. どちらとも言えない」「4. あてはまる」「5. かなりあてはまる」と答えた子どもの全体に占める割合をつけ加えている。

この表からわかることは、登校回避感情を持つ子が、「先生に相談する」という感じ方をいかにもっているかということである。2003 年から 2005 年にかけての研究開発の時期は、9 回の調査の中で、3 回の相関がまばらに見られる。2008 年 3 月の調査までは同じような相関の出現割合であるが、2008 年 7 月調査より、4 回連続して相関が見られる。教員の側からすると、登校回避感情をもつ子に課題意識をもち、相談活動を意識的に取り組んできているということである。結果として、登校回避感情をもつ子は、教員に相談しているという感覚をもってきた、ということが実際のことであろう。「ほっとアンケート」を材料にして取り組んでいる教育相談をベースにして、学校生活調査の結果からの速報をもとに、子どもたちの微妙な変化を感じ取れる力を教員がつけているということのあらわれである。

実施	Pearson の相関係数	3 4 5 の割合
2003. 7	0.026	16.7 %
2003.12	0.240 * *	8.1 %
2004. 3	0.118	10.8 %
2004. 7	0.103	10.7 %
2004.12	0.119	8.5 %
2005. 3	0.114	15.0 %
2005. 7	0.189 * *	12.7 %
2005.12	0.087	8.8 %
2006. 3	0.227 * *	10.9 %
2006. 7	0.143 *	8.4 %
2006.12	0.106	11.0 %
2007. 3	0.025	13.3 %
2007. 7	0.096	9.2 %
2007.12	0.245 * *	11.0 %
2008. 3	0.096	13.3 %
2008. 7	0.182 * *	10.2 %
2008.12	0.338 * *	12.7 %
2009. 3	0.181 * *	11.2 %
2009. 7	0.247 * *	7.7 %

Pearson の相関係数で

* 相関係数は 5 % 水準で有意 (両側) です

** 相関係数は 1 % 水準で有意 (両側) です